

発達障害

空気をよみますずに、

# 言いたい放題

## 生徒の心の叫び

第50回

### 山崎茂雄さん

公立高校教諭（国語科）  
学校心理士スーパーバイザー  
上級教育カウンセラー  
そのユニークな教育実践は、個人サイト「教育エジソン」  
<https://www.ed-ed.net/>  
で。



このコーナーは、発達障害のさまざまな当事者、支援者の方に、言いたいことを伝えてもらうリレー連載です。

### 自分自身の生きづらさ

いくつかの高校を経験した中で「チャレンジスクール」の生徒達に一番親しみを覚えるのは、私自身が幼い頃から多くの生きづらさに苦しんでいたからです。

私は公立高校の教員ですが、ここ十年余りは、不登校などを経験した生徒でも再発できる昼夜間定時制高校「チャレンジスクール」の現場で働き、発達障害を含め、生きづらさをかかえる多くの生徒達と関わってきました。

物心がついた頃から、「みんながぶつうにできることが、自分にはできない」と感じていました。

体育では誰よりも走るのが遅く、逆上がりはできないし、跳び箱も跳べな



い。うまく歌えず、リコーダーもできない。へたくそな自分の絵は、見るのも嫌でした。  
そして、友達づきあい。対等に気持ちをおつけ合って、けんかして仲直り。みんなはそれができるのに、自分ばかりかわれて、泣いて、痲癩<sup>かんじく</sup>を起して物を投げる……。

どうしたらいいかわからない。でも、先生もやり方を教えてくれない。「何でできないの？」という顔をしているのです。

ひとりで本を読んだり、機械の分解や科学実験をするのが好きだったので学業成績はよく、その浅はかな自尊心はあったものの、青少年期を通じて、ずっと劣等感のかたまりでした。

未熟なまま大学を卒業し、深い考えもなく教員になった私は、初任の夜間定時制高校で、担任クラスの生徒達とうまく関係が築けず、学級崩壊を招いて逃げるように異動しました。

## 私を一変させたもの

追いつめられた私ができる思いで始めたのは、中学時代に出会った「自律訓練法」を応用した瞑想です。その習慣が私の人生観を一変させました。

「人よりできない」のは事実だが、リラックスしてやり続ければ、カラオケも楽しいし、カナヅチを克服して水泳が趣味にもなる。

さまざまな不安は実は誰にでもあると気づき、人間関係も怖くなくなりました。そして、一転してポジティブ教師に変貌したのです。私の特性は生かされ、「障害」ではなくなりました。

## 何とかしたい

そうした経験から自分の受けてきた教育の「不親切さ」が目につき、「何とかしたい」と具体的方法を工夫することが、私の教員としての歩みでした。国語の授業や進路指導でそうした

試行錯誤をくり返していましたが、

チャレンジスクールでは、人間関係スキルや学習スキルを教える新しい科目づくりや、生徒達の成長ステップを支援する学校のしくみづくりにも取り組むことができました。

そうした工夫は生徒達の成長する姿によってむくわれ、時代の変化と共に注目もされるようになりました。

が、私自身はそれが「特別支援教育」だとは思っていません。私は、学習の中で生徒一人ひとりの頭と心が働き、「やったらできた」を実感してほしい。それは、



「できない。どうしたらいいの？」という生徒の心の叫びが、いつも聞こえる気がするからです。

チャレンジスクールの先生方は発達障害に理解がありますが、研修会などで他校の先生と話す時、「親の育て方にも問題あるよね」などの心ない言葉が胸に刺さります。

実は、私の息子が大学に入ってから多くの困難に直面し、発達障害に気づいたからです。家族で奮闘する中で、親のつらさもようやくわかるようになりました。

その一方、大学の先生方や医療関係、公的支援、支援団体、当事者や親の会、講座・学習会など、さまざまな方々のお世話になり、そうした存在のありがたさを痛感しています。

「どうして自分だけが……」と立ち尽くし、ひとりで何とかするしかなかった自身の歩みをふり返ると、時代は変わったと感じます。